

# 鉄幹と新国文運動

堀下翔

## はじめに

明治二三年、落合直文は「国文学現今の景況及勢力」（『国文学』第二一号、明治二三・四）において国文学研究・教育の隆盛を喜んだ。欧化主義から国粹保存へと時代の主潮がうつろう明治二〇年代初頭にあつて、皇典講究所は卒業生を教育界や文筆・新聞界に輩出し、帝国大学文科大学や第一高等中学校では国文教育を開始、東洋学会・かなのくわい・大八洲学会・日本文章会等の活動も活発である（同前）。直文が古典講習科の同期である小中村義象・萩野由之とともに国書の翻刻叢書である『日本文学全書』（全二四冊、博文館）の刊行を開始したのも同年五月のことであつた。古典講習科や東京大学文学部の卒業者らによる国文学研究が可視的に出現したこの明治二三年を前田雅之は「国文学始動元年」と呼称している<sup>(1)</sup>。

趨勢は文体改良ともリンクしている。言文一致運動が停滞を迎えたこの年、直文は、前年に発表した「文章の誤謬」（『皇典講究所講演』第一一号、明治二二・七）を発展させた「将来の国文」（『国民之友』明治二三・一一・一三〜一二・二三）をはじめ、多数の文章論を発表した。直文は現今の諸体に蔓延する語法の誤りを憂え、正

確な「国文」（和文）の文体を鍛えることを啓蒙する。文章や講演・講演を通じて彼の啓蒙は一般に新国文運動と称される<sup>(2)</sup>。

文学史上、新国文運動は鷗外の雅文体や明治三〇年代の美文<sup>(4)</sup>に対する影響で知られるほか、明治二〇年代前半に集中的に発表された和歌改良運動の言説が新国文運動等の「国文学復興の機運に支えられ」ていたことが武川忠一によって指摘されている<sup>(5)</sup>。また和田繁二郎はこの時期の直文の言説を踏まえ、「直文の新しい歌は、国文学振興の実践の一環として行われていたもの」としている<sup>(6)</sup>。これらの指摘は当時の新国文運動を視座として新派和歌の位置を相対化する努力を持つていようが、その具体相は検証されないまま現在に至っている。

本論文では、新国文運動と和歌との関わりを、主に、直文に師事した与謝野鉄幹の論作への注目から論じる。後述するように鉄幹は新国文運動を強烈に意識して直文に師事し、活動した人物である。

## 一、浅香社同人の入門の経緯

はじめに、浅香社同人と直文との関係を再考しておきたい。

明治二六年に直文が最初の新派和歌の結社・浅香社を結成したという事実を、和歌／短歌史はたとえば、「かつてからその傘下にいた同志を糾合」(木俣修<sup>7</sup>)、「国分操子・大町桂月・塩井雨江等は早くより彼に師事してゐたが、二十五年に内海月杖・伊藤正弘・与謝野鉄幹等が入門するに及び、同年の秋頃より直文を中心とする短歌革新の実行的機運が表面化するにいたつた」(小泉荃<sup>8</sup>)などと叙述する。

問題は、直文と同人が師弟の関係にあったことは事実としても、それははたして何の師弟であつたろうか、ということだ。「落合直文は(…)旧派の歌よりは新しみがあつた」ということで、当時の若い人たちに非常に人気が出まして、直文のもとにたくさんの方が集まつてくる。あさ香社に結集してくる」(藤岡武雄<sup>10</sup>)というように歌の師弟とする認識もあるが、実際のところは、「落合直文は、第一高等学校その他に教職を持つて居た関係上、弟子の範囲が広がつた。其中には大学その他で、国文学或は他の科に進んで、益盛んに歌や国文学に興味を持ち続けた者も多かつた」(引用者注…それらの者が浅香社に集つたが)熱心でない人も多かつた(折口信夫<sup>11</sup>)というように、「国文」への熱意から直文に師事した者たちが浅香社に参加していたという二重構造があつたのではないだろうか。

折口の指摘は同人の回想から裏づけることができる。

「熱心でない人」の筆頭は大町桂月で、浅香社の結成にこそ参集したが歌合で女学生と組まされることに辟易して遠ざかつた<sup>(12)</sup>という彼がそもそも直文に師事したのは「国粹保存論起り、国文学復興し、落合先生の文名、一世に高し。余は之にかぶれて終に国文学に

志すに至れり<sup>(13)</sup>」という次第であつた。まさに新国文運動への共鳴こそが師事の動機だったのである。

のちに歌人としての人生を送つた同人であれ、入門の経緯に関する回想には「国文」の語を徴することができる。まずは、『叙景詩』(明治三五・一、新声社)の共選者であり、その後戦後に没するまで歌人として活動した金子薫園と尾上柴舟につき確認しよう。

金子薫園は『古今集』を守唄のように歌う母の影響で早くから作歌していたが、尋常中学校時代は作文にも熱中、明治二五年には「落合直文先生の創せる新国文に随喜し、国文を修めむとする志を起し独学研鑽」するようになり、翌二六年に直文と対面して「浅香社に入ることを許さ」れた<sup>(14)</sup>という。浅香社への入会とはいうが、入門時に持参したのは「兼好法師の事を書いた一文」であつた<sup>(15)</sup>から、直接的な動機は新国文にあつたわけだ。前述の和田の指摘とも関連するが、浅香社の和歌改良運動は、それが表現に関する運動である以上、新国文運動の実践としての側面を持っていた<sup>(16)</sup>ことであろう。この二つの運動をそれぞれ起動させたのは古典講習科に学んだ者たちである。

尾上柴舟の回想<sup>(16)</sup>は、直文への師事ということを考えるうえで注意すべきニュアンスを含んでいる。柴舟は上京当初に書店で『日本文学全書』を見て直文・由之・義象を知り、その後『少年園』に掲載された直文の「孝女白菊の歌」に心を奪われ、東京英語学校時代には義象との共著『歴史読本』(全二二冊、博文館)の「流麗明快」の文体に夢中になつたという。「落合先生に御目にかゝつて見たい」と思ったのがのちに「大学の国文科に這入る基」となつた。

尋常中学校に入った柴舟は、大口鯛二の指導を受けて歌を作るようになった。その頃は、同級の別学級に金子雄太郎（薫園）という者がおり、すでに直文の弟子であるという噂を聞くことになる。

私も、其様に、先生の御宅へ伺つて見たいとも思ひましたが、此時は、歌の方が好きで、文の方は忽諸にして居つたものですから、つひつひ、金子君と話しもせず、先生の方へもあがらずに終りました。

内気な柴舟は、作文の修練はおろそかにして歌に熱中するおのれに、直文にまみえる資格はないと考えたのである。「国文は、非常に隆盛」であつた第一高等学校時代も、義象とともに教鞭をとる直文の授業は担当学年が違ふので受けることができず、縁故もないので直接訪ねることは憚られ、結局、「文科志望の学生を連れて来い」と直文に誘われた安倍叔吾の誘いを受けてようやく対面、「国文と云ふ事」や「近時の歌文の御批評」を聞かされて感激し、入門に至つたという。柴舟にとり作歌と作文は懸絶するものであつたが、一方、訪ねてきた青年に直文が提供する話題はそれを区別しない。「兼好法師の事を書いた一文」を持参した薫園がそのまま浅香社に入会するといういささかねじれたようにも見える事態にせよ、彼がもとより歌詠みであつたという事情を差し引いたとしても、歌文を連続的に捉える直文の文芸観にあつては元来おかしなことではなかつた。対面の感激を柴舟はこのような言葉で語る。「こんな事は、平素から、知りたい知りたいと、思うて居つたものですから、誠に、有難

くつて、唯々、涙のこぼれる様な心持がしました」。柴舟は別の教師による国文教育自体はすでに受けていたわけだが、新国文運動の立役者たる直文が語る本質論やアクチュアルな議論には平生の機会を獲得しうる知識以上の価値が感じられたのであろう。

この一文に見られる純粹にして切実な知識欲のありようは、数年にわたつて遠くから思慕した直文の警咳についに接しえた柴舟の思いの深さをも示唆しているようが、この時期、国文を学ぶにあつて直文に格段の思い入れを持つていた青年は柴舟ばかりではなかつた。第一高等学校や国語伝習所など多くの学校で直文と同僚の關係にあつた国文教師・今井彦三郎は教場での直文について「感化力が強くして、人を吸収するに一種の力を持つてゐて（…）教師の信用と云ふものが、単り落合君に吸収られて仕舞つて、私共は其吸売の跡の生徒を取扱つて居るやうな訳で、不快に感ずる事もありました」と回想する<sup>(17)</sup>。国文教師にも学生からの支持には濃淡があり、直文に心酔する者が多かつたのである。

また芳賀新一によれば、当時の第一高等学校には直文の書体を真似た答案、文体を真似た作文が多数あつたといひ、尋常中学校・師範学校の教員の検定試験でも、受験者は直文の愛読者ばかりで、作文の文体や文法への理解はみな直文を範としていた<sup>(18)</sup>。大槻文彦『広日本文典』（明治三〇・一、大槻文彦）の完成よつて文法の整理が一定の定着を見る以前、各種の文典は執筆者ごとに異なる文法理解を提示していたが、教師を志望する受験者たちは「落合の文典といつて、為に世を響かした」（義象<sup>(19)</sup>）という直文・義象共編<sup>(20)</sup>『中等日本文典』（明治二三・一二、博文館）を用いたのである。明治二〇

年代の国文熱、そしてそれを背景とする新国文運動は、かように直文の属人的な人気に支えられていたという側面があった。

浅香社でもっとも意欲的に活動した鉄幹は、小学校以上の近代的な学校教育を受けた人物ではないが、彼もまた新国文運動に同調する形で直文に接近している。

鉄幹が直文の名を知ったのは山口県の徳山女学校の教師だった明治二二年のことである。「初めて森鷗外先生等の雑誌「柵草紙」に親み、また落合直文先生の著述を読む。此頃国文学に興味を持つ」。明治二二年創刊の『しがらみ草紙』は直文が和歌や小説を発表した雑誌でもある。

明治二五年三月二十九日の河野鉄南宛書簡では「国文学の流行熱ハ殆んどその度をきはめぬ 都にひなに文典を脇にし三十一文字を口にする人々の日を追うて増加する まことにうるさきばかりなるを。知らず此間に立ちて真成の大手腕を有する豪の者ハ何人ならん」と実作者の国文熱を揶揄しているが、同八月九日の近藤茂世宛書簡では「今後の国文学は文典研究の時代にあらず いはゞ文典応用の時代ならむと この卑見幸にしてあやまらずは今後の国語学者がなすべきことは即ち小説の新著ことに雄大長篇の小説を新著せんこと あるは歌曲の新作ことに豪壮勇烈の歌曲を新作することの如きその尤も切要なるものならんかと考へ侍り」とし、国文の知識を実作に活用することを理想視した。いずれも教師時代の書簡である。ここでいう「歌曲」は和歌・新体詩の謂いと思しい。前述の読書歴を思い合わせれば、この書簡で鉄幹が念頭に置いていたのは、国文学者として著述を発表する一方でその知識をもつてして

和歌・新体詩・小説の実作を世に問う直文であったと想像される。そして直文には欠ける「豪壮勇烈」の気風の作は、この手紙のすぐあとに上京する鉄幹自身が実現してゆくことになる。

鉄幹が『こゝろの華』第三巻第九号（明治三三・九）に寄せた談話「国詩改良の歴史」には「明治の国文は落合小中村などの先輩に依つて着々と改良せられて居る、けれども国詩は依然として真淵派、景樹派の単調な、無趣味な、浅薄な、陳腐なことを繰返して居るのを見て、此国詩も亦是非改良せねばならんものだと子供心ながら考へた」とある。上京を果して直文から聞かされた意見も同様であったという。「国詩」は明治二〇年代の詩歌論に頻出するタームで、和歌をはじめとする日本語の詩歌ジャンル全般、ないしはそれらを改良したものを指す。ここでは賀茂真淵・香川景樹が引き合いに出されていることから和歌を意味する。他の同人と比べたとき、鉄幹は新国文運動の成果を和歌の実作に反映させようとする視野を持っていた点に独自性があったと考えられる。

このように並べると明らかのように、浅香社同人が直文に師事した経緯には新国文運動が大きく作用していた。そしてそこには種々の機微が存在していたことも指摘できる。新国文運動は表現史の問題であると同時に、共鳴・熱狂・思慕・立志などさまざまな形態で現れる師愛、すなわち、これと見定めた一人を強烈に意識しながらもの表現する者のうちに結構される心のありようの問題としても捉える必要があるだろう。

## 二、鉄幹散文と新国文運動

ここからは明治二〇年代に鉄幹が発表した散文・和歌と新国文運動の関係を具体的に検討する。まず本節では、新国文運動の期間とほぼ重なる明治二四年から同二七年にかけての鉄幹の主な発表媒体であった『婦女雜誌』の記事を扱う。鉄幹の初期散文は従来、「亡国の音」(『二六新報』明治二七・五・一〇～一八)等、和歌改良運動に布置しうるものが注目され、それに先駆けて執筆された記事は言及されてこなかった。しかしながら、新国文運動という視点で捉え直したとき、これらは上京前後の鉄幹の意識を探るものとして重要な資料となる。なお当時の筆名「言靈廻舎」ないし「奇美霊の舎」名義で発表されたものだが便宜的に「鉄幹」と呼称する。

鉄幹は『婦女雜誌』の創刊直後の第一巻第二号(明治二四・二)から全五回にわたって「作文のしをり」を連載している。読者である若年の女性を想定した作文入門の記事である。第一・二回は仮名遣いを取り上げ、「を」「じ」「わ」「い」「え」につき誤りやすい語を大量に列挙する。第三回は音便がテーマで、「ついたち」「はうき」など原形と理解されがちなために誤った表記で書かれやすい音便化の語を列挙して解説する。第四・五回では「言語」と題していわゆる自立語と活用語の別を論じ、動詞の活用形を解説、第六回では係結びを取り上げる。

仮名遣いから品詞論、そして活用形へという記述の順序は直文の文典をはじめとする当時の文典の一般的な体裁をなぞったものである。「作文のしをり」はかねて国文に関心を持っていた鉄幹が『婦

女雜誌』という発表の舞台を得て書いたおのれの文典なのである。最終回の結びには「あはれ世の諸姫よ、諸姫は後来の我國民の母なり。國民の母にして、支離散乱の作文を作らんか、いかで國民にして、これにならハざらん。若ししからんか。外蕃に耻となるのみならず、國民の精神とする所、四分五裂して遂にハいふべからざる、忍ぶべからざるものあらんとす。いかんとなれば、一國の言語文章ハ、一國民の精神を團結せしめ、及び支配するものなればなり」という一節がある。それが國民國家の条件であればこそ将来の國民を座み育てることになる「諸姫」(『婦女雜誌』の読者)には正確な文法知識に基づいた文章能力が要請されるというこの論法には、明治二〇年代という「官民一体による統一的「國民」の創出と「國家」意識の高揚の時代」の「言語文学と國家とが有機的に結びつく」国語観(イ・ヨンスク)<sup>(23)</sup>が露出ししている。

第四回に言及のある動助辞／静助辞はそれぞれ現在という助動詞と助詞のことで、直文の文典の用語である。文法用語や概念の位置づけが一定していなかった当時のこと、他の文典ではたとえば助動詞／後詞としたり(中根淑『日本文典』明治九・三、中根淑)、動詞／てにをはとしたり(大槻文彦『語法指南』明治二三・一〇、小林新兵衛)、動詞の一部と助動詞／てにをはとしたり(関根正直『国語学』明治二四・六、六合館)という様相で、鉄幹が参照していたのは直文の文典であった可能性が高い。ただし直文の文典と同時期に出た服部元彦編『雅俗日本小辞典』(明治二三・一〇月、国語伝習所)にも動助辞／静助辞という名称が採用されている。「作文のしをり」にはもう一つ、活用形を未然・続用・断止・続体・已然と呼

称する特徴があるが、これも直文・元彦それぞれの文典で一致する。元彦の文典を発行した国語伝習所の主任講師は直文であったから、直文が考案して国語伝習所で共有されていた用語であったかと考えられる。

第一巻第一〇号（明治二四・六）からは「作文のしがらみ」と題する記事の連載が始まる（全九回）。これは「言語の法則を畧述」した「作文のしをり」に対して、「よこさの道に踏み迷ふともがらを、しがら、かけて、ふせ」ぐ（同輩が横道に迷うのを冊で防ぐ）ために「言語の用みかた」を具体的に指南することを目論んだものである（第一回）。「まじ」と「まし」、「うかれて」と「あくがれて」など混同しやすい語の区別、「なでふ」「やらぬ」など難語の語義・用法といった事項が取り上げられている。誤りやすいものに注意を払う傾向が「作文のしをり」の時点ですで見られたが、「作文のしがらみ」では顕著である。

秩序に沿って解説が進む「作文のしをり」が文典を意識したものであったとすれば、個別の知識を教授する「作文のしがらみ」は直文の新旧文運動の論説と類似する。新旧文運動の発端となった論説「文章の誤謬」（前出）は、同時代の文体改良の言説と比べたとき、社会に流通する文学や新聞記事に文法上の誤りが夥しいことを実例を挙げて指摘し、改良の必要性をそこに見出した点に一つの特色があると考えられる。文中で「諸君の注意を乞はん」として特記される誤用の一つに「か」と「や」の混同、つまり、「何」を含む疑問文では「か」が呼応すべきであるにもかかわらず「や」としてしまふような例があるが、「作文のしがらみ」で最初に取り上げられるの

もこの事項である。規則や正用を列記する文典に学ぶだけでは体得しがたい実際のな言語の運用を数挙げて教授するスタイルは直文と鉄幹に共通する。「作文のしをり」も「作文のしがらみ」も上京前の文章だが、すでにこの頃鉄幹は直文の啓蒙態度を意識していたのではないだろうか。

『婦女雜誌』の鉄幹散文からは最後に、上京後の第三巻第六号（明治二六・三）の「批評」欄に掲載された「簪花女史の近詠数首を讀みて」を取り上げ、作品に対する具体的な批評の面から新旧文運動との関わりを探ってみた。前号に掲載された伊藤銚子（簪花）の今様に対する批評である。今様形式は当時、和歌の一体と分類されることが多く、直文編『新撰歌典』（明治二四・一一、博文館）や鉄幹「歌道の沿革」（『婦女雜誌』第二巻第五号、明治二五・三）でもそのように理解されている。鉄幹は簪花の発表した三首すべてに批評を与えているが、ここではタイムに特色がみられる一首目「新年望山」の評に注目する。簪花の「新年望山」は次のような作である。

富士のたかねの雲晴れて 雪もさやかに見えぬなり  
けさ立かへるあらたまの 年のひかりやしひぬらん。

鉄幹はこの今様を次のように評する。

此歌の第二句は、時間上、於て疵なきか。歌の意は明かにして、雪のさやかに見ゆるは、年の光の添ひたればならむとなり。然らば第二句の見えぬは、見ゆると云ふ可きに非るか。見

えぬにては、第四句の添ひぬと時間を同じうす。斯くては年の光の添ひたると、雪のさやかに見ゆるとの間に、時間の隔て無く、雪のさやかに見えたる時、年の光の添ひたるならむとの意には成らざるか。さては、雪のさやかに見えたるは、年の光に関係無く、之を想像するに及ばざるなり。吾は斯かる所にては、見ゆると現在の時間に云ひて、添ひぬの小過去にむかへ、時間の隔てを示す可きなりと思ふ。

作者の詠もうとした歌意を想定し、そこから逆算的に言葉の用い方を批評する論法である。二度用いられている「ぬ」に注目し、歌意に照らして細緻に論を進めている。この論法自体は辞に意を用いた国学者系の歌人に見られるもので、鉄幹が注目していたことが指摘されている海上胤平が、『歌学大云歌範評論』（明治二六・四、吉川半七）にて小出繁の（き）のふけふ花も目につくいけ垣のつはき隠れに驚のなく（題「垣驚」）を「結句驚のなくといひしハけふのみにかゝりてきのふにハうちあはず」と難じているのがその一例である。鉄幹の場合、「時間」「小過去」「想像」という従来の歌評には現れない用語を駆使している点に特色がある。これらは文典の用語である（ただし「小過去」は『国語学』（明治二四・六、六合館）等の関根正直の文典に見られる語で、直文は「半過去」とするものである。鉄幹が直文以外の文典も閲していた可能性が考えられる）。加えて、直文が「将来の国文」（前出）において、時制表現の区別を意識せず単一の助動詞を多用する拙さを非難していることも指摘しておきたい。文典や新国文運動の論説を受容したこの歌評は、詞の

詠みこなしや歌格、証歌、ないしは作者の詠歌態度を云々する古典的な歌評とは一線を画し、国学者の歌評と比べても緻密なものである。それは、先の近藤茂世宛書簡（明治二五）に「今後の国文学は文典研究の時代にあらずいは、文典応用の時代ならむ」と記した鉄幹が果した実践であった。

鉄幹の批判には興味深い点がある。第四句は第二句の原因を示しているのだから第二句と第四句の時制をも「ぬ」とするのは「時間上」おかしいというのが批判の要旨である。ここで鉄幹は、「時間の隔て」を正しく示した作例として『古今集』の（さよ中と夜は更けぬらし雁が音の聞ゆる空に月渡の見ゆ）を挙げて、「小過去」の「更けぬらし」と現在の「見ゆ」とが区別されると述べようとしているわけだが、「ぬ」をアスペクトではなくテンスと取るのも明治前期の文典の特徴である。<sup>(25)</sup> 「更けぬらし」をアスペクトと解釈すれば「時間の隔て」という概念を導入せずとも差し支えはない。それは鉄幹が「時間上」の故障があると考えた簪花の作でも同様である。たしかに「ぬ」が連続するのは単調で芸がないが、第二句と第四句がともに「ぬ」なのが文法的な誤謬とまでは言えない。時性を帯びた文法理解が歌の評価に影響を及ぼした例である。

むしろ簪花の作に歌疵があるとすれば、「見ゆ」と「ぬ」と「なり」が接続した「見えぬなり」という詠みぶりがあり得るだろうか、用例があるとして規範文法的に正しいだろうか、という点ではないかと思われる。現在では推定の助動詞と捉えられるこの「なり」には、音声に関する語と共に起する傾向があり、「見ゆ」という視覚的な用言とは結びつきがたいからである。

当時はこの「なり」の理解が定まっておらず、直文の文典では「慥にいひ定むる」「決定辞」とされている。いわゆる断定の「なり」とは異なり終止形に接続するという特徴はすでに認識されていたが（直文は体言ないし連体形に接続するいわゆる断定の「なり」にありといふ意」とする）、いみじくも直文の文典が挙げる『古今集』の〈秋の野に人まつ虫の声すなりわれかど行きていざとふらはん〉が示唆するような音声に関する語との関係は、諸文典で総じて指摘されていない。

「見ゆ」という語を用いるのであれば、鉄幹の言うとおり、「見ゆるなり」と処理するのが定法だろう。それは従来の歌評の用語でいえば、「かなふ」という感覚で説明されるはずだ。先の『歌学会歌範評論』でいえば、林麿臣の〈雨雲をはらひかねけむ籠坂のなこりさむけき夕あらし哉〉（詞書「籠坂懐古」）に対して胤平は「二句けむとしてハ結句夕風かなとハいひかたし／二句（はらひかねたる）」といはされハ叶はぬなり」という評言を与えている。なぜ「けむ」ではなく「たる」がよいのか、「叶はぬ」からだという以上の説明はない。古歌に通じた実作者であれば、古歌との差分から違和感の所在はわかる。しかし、コロケーションや語の呼応関係は、論理的には説明しがたいものである。

まして簪花の作の場合、当時の文典では解明されていなかった「なり」が絡んでいる。鉄幹は表現の違和感を説明しようとして、「時間の隔て」という不要な補助線を引いて失敗している。結果的には、連体形「見ゆる」とすれば「なり」の意味が変わるにも関わらず、諸文典の理解では「見えぬなり」と「見ゆるなり」の意味的

な差異を適切に識別したうえでこの作の表現を検討することができないという、文典の限界が露呈するのである。

かように当時の文典は、「応用」が可能な代物ではなかった。鉄幹がこの問題を認識していたかは定かではない。ただ、鉄幹がこの種の歌評を『婦女雜誌』に書いたのはこれが最初で最後だった。以後の歌評は、「何たる詞づかひぞ」「あハれをさなき詞づかひ」（歌疵を論ず（二））第四卷第二号、明治二七・一）といった抽象的な議論にまで後退する。歌評における「文典応用」は挫折したと見ることができる。

### 三、鉄幹和歌と新国文運動

本節では、前節で触れた「なり」と同様に明治二〇年代には用法の解明が不十分だった助動詞「らむ」を用いた鉄幹の歌を検討し、鉄幹の和歌を当時の文法理解との対応から捉え、詠歌における「文典応用」のありようを考察する。

直文の文典は「らむ」について『古今集』（久かたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ）を挙げて「俗言のデアラウにおなじ」とするのみである。しかしこんにちでは、眼前にない現在の状況を想像する現在推量、眼前の現在の状況の原因等を想像する原因推量の助動詞であることが知られている。

鉄幹の第一詩歌集『東西南北』（明治二九・七、明治書院）は「らむ」を用いた歌を二五四首中三四首収めるが、「らむ」はどのように用いられているだろうか。



（いくたびか、まどかになりて、砕くらむ。／鳴門の海の、秋の夜の月。）（題「海上月」）は、鳴門の海に映ずる月影は、何度波が落ちて着いて丸くなり、そしてまた砕けるだろう、という歌で、明らかには海は眼前である。

「妓に与ふ。二首」という詞書で（なさけある、君にもあらば、一たびは、／夢のなかにも、見えけむのを。）につづく二首目（逢見ては、世のならはしに、怨むらむ。／人のなさけは、いつはりにして。）も同様である。「逢見ては」を（くした以上は）と取れば、もうこちらは愛情を失っているのに会ってしまい、「君」はいまさぞ失望しているだろう、という歌。仮定と取れば、もし再会すればこちらが愛情を失っていることを知って「君」は失望するだろう、という歌。「妓に与ふ」というからには後者の想定で、手紙に書きつけてもしたという趣向の歌だろう。いずれにせよ「らむ」を現在推量・原因推量とは解しえず、直文の文典と鉄幹とで「らむ」の理解が一致しているといえる。直文歌にもこの種の「らむ」が見出せる。「父の身まかれるも知らで、文おこせたる人々あり。」という詞書の（この世には名あての人もおはせぬを誰に見よとのたよりなるらむ）（『帝国文学』第一巻第六号、明治二八・六）は、眼前の手紙に対し、単純な推量の意味合いで「らむ」と詠んでいる。

しかしながら鉄幹は「俗言のデアラウにおなじ」よりも詳しい用法を認知していたのではないだろうか。というのも、前節に挙げた「簪花女史の近詠数首を讀みて」において鉄幹は「富士のたかねの雲晴れて 雪もさやかに見えぬなり／けさ立かへるあらたまの年のひかりやそひぬらん」という簪花の今様を、「雪のさやかに見

ゆるは、年の光の添ひたればならむ」と解しているからだ。「たれば」という因果を示す語は、「らむ」の原因推量の用法を反映したものであるのではないだろうか。

『東西南北』所収歌を確認する。

（もみぢ葉も、心あるらむ。見てあれば、／赤き方より、まづこぼれけり。）（題「紅葉」）は、「見てあれば」なので現在推量ではあり得ず、「俗言のデアラウにおなじ」の「らむ」と取った場合も第三句以降の歌意と繋がりがたいため、原因推量と考えられる。想が似る（ばら一枝、あかきは君が、なみだにて、／しろきは君が、まことなるらむ）（題「薔薇」）も薔薇が赤いのは君の涙だからだろう、白いのは君の誠実さゆえだろう、という口吻がある。（隅田川、花やちるらむ。漕ぐ船の、／苦に色ある夕あらしかな）は、隅田川をゆく苦舟の内部に視点がある歌で、（もみぢ葉も）の歌と同様に「らむ」の前後の内容が因果となっており、夕嵐の吹きつける苦が色味がかっているのは墨堤の桜が散っているからだろう、の意。初出の『二六新報』（明治二七・四・三）では第二句が「花やちるらし」になっている。第二句が第三句以降の原因を説明する成案に対し、初案では因果が逆である。認識の順序が自然になるようにした推敲だろう。

現在推量の「らむ」の用例も見られる。（この秋も、我はかへらず。ふるさとの、／川ぞひ柳、ひとり散るらむ。）（詞書「秋日、郷を懐ふ」）が一例で、故郷に錦を飾るまでは帰れない立志の青年が、子供時代に遊んだ川沿いの柳を郷愁の拠所にするというこの歌は、遠くのふるさとの柳を想像するときに「らむ」を用いており、鉄幹が現在推量の用法を理解していたことを窺わせる。

他の歌人についても見ておこう。(須磨あかし月もさくらも此ころは君がかへりを待ちわたるらん 直文) (詞書「井上君の播磨に行くをおくりて」、『日本』明治二六・四・三)、(わたつみの底にも匂ふさくら哉たつの都のひとや見るらん 鍋島直大) (題「海辺花」、佐々木信綱撰『明治歌集 第一編』明治二七・二、博文館) は現在推量、(なかくれる花こそ見えね小金井の桜もこゝやとまりなるらん 直文) (詞書「小金井のおくのかたにて」、『第一高等中学校校友会雑誌』第二六号、明治二六・四・二七)、(見わたせる野へハ緑に成にけり去年のふる草や萌ぬ覧 増山守正) (題「草漸青」、『筆の花』第二七号、明治二三・三) は原因推量の「らむ」である。直文やほかの同時代の歌人の作にも鉄幹と同じく「俗言のデアラウにおなじ」という理解を超えた「らむ」の用例が確認できるのである。

結局、古歌を知っていれば助動詞の詠みわけは経験的に可能だったということだろう。直文自身、「文をかゝんと欲せは古文を読むへし。歌をよまんと欲せは古歌を読むへし」(『将来の国文』)と考えていた。

正岡子規が随筆「筆任勢 第二編」(明治二三)<sup>(27)</sup>に「らん」と「らし」という興味深い一文を草している。第一高等中学校の学生であった子規が直文の講義を受けて考えたことが書かれている。「想像辞の「らん」と「らし」との区別に至りて贅味として分らず」。当時の学生の実感としても直文の「らむ」の理解は隔靴搔痒の感があったのである。そこで子規は自身で検討する。「歌を読みても こゝは「らん」といふべき処か「らし」といふべき処かはおのづからきまりあるが如く覚ゆ」。結果子規は、「らん」と「らし」では因果が逆

転すること、「らん」は「未来を現はす時、又見えも聞えもせぬことを想像する時」に用いることを発見する。誤りもあるが、直文よりはよほど明瞭に「らん」の用法を言語化しえている。

これほど分析的な人物は珍しかっただろうが、「おのづからきまりあるが如く覚」える程度感覚ならば多くの実作者が持っていたであろうことは、先の鉄幹の(隅田川…)の歌の推敲からも想像される。「らし」を用いた歌の場合も適切な分別の証跡を発見するのは難しいことではない。たとえば佐々木信綱編『婦女詞藻 第一編』(明治二四・五、博文館)に、佐々木弘綱・信綱父子に学んだ竹屋雅子の(大ひえの高ねのみ雪とけぬらしかも川瀬にかすみ棚ひく) (題「川霞」という歌が出ています。加茂川に立つ霞という春光に接したことが契機となり、比叡山の雪解のさまという別の春の到来を想像した歌で、上句は結果を表す内容である。上下の句を因果で構成しようとしたまま「らし」を「らむ」に取り替えてしまえば、主体人物が雪解の比叡に登っていることになり、穏やかではない。詠もうとする因果関係にに応じて「らし」と「らむ」が使い分けられているのである。

## おわりに

本論文では、新国文運動と和歌との関わりを、鉄幹を視座として検討した。第一節では、浅香社の同人らが直文に師事した動機が和歌ではなく新国文運動にあったこと、そして鉄幹は、新国文運動の成果を和歌に反映させるといふ、他の同人にはない視点を持っている

たことを指摘した。続く第二節では新国文運動に対する鉄幹の関心の具体相を辿り、本人が目指した「応用」が結果的には挫折したことを指摘した。第三節では鉄幹の歌を検討し、当時の文典の文法理解が古歌を読む者の経験知よりも未熟であったという実態に触れた。

新国文運動は正確な知識に基づいた言葉の運用を目指すものだったが、屋台骨である文法研究が過渡期にあったために、テキストの表現の正確さをロジカルに判定するような実用に耐える基準を持ちえず、完全な実現は難しかった。新国文運動に文学史的意義があるとすれば、表現には正用と誤用ということ自体を可視化し、それを表現の価値判断として機能させたこと、そしてその達成のために、輝かしい「将来の国文」をゴールとして設定することで人々を表現の意欲へと導いたことであつたのではないだろうか。直文によって新国文運動に動員された青年たちは、直文の記憶とともにその表現観を内面化し、明治三〇年代以降の歌壇を主導してゆくことになる。

注

(1) 前田雅之「『国文学』の明治二十三年」(前田雅之ほか編『幕末明治移行期の思想と文化』平成二八・五、勉誠出版)。国文学をめぐる明治三三年の状況に関してはこれより先、窪田空穂「明治前期の国語国文界の見取図」(『早稲田文学』第二三三号、大正一四・七)ならびに『明治文学全集 第四四卷 落合直文 芳賀矢一 藤岡作太郎集』(昭和四三・一二、筑摩書房)における久松潜一「解説」が言及している。空穂と前田は井上毅の政治

構想との関係を強調する。

(2) 文体改良における直文の新国文運動の位置や展開については山本正秀「近代文体発生史の史的探究」(昭和四〇・七、岩波書店)、同『言文一致の歴史論考』(昭和四六・三、桜楓社)所収の「明治三三年の鷗外・美妙・直文の文章論」に言及がある。

(3) 鷗外と新国文運動の関わりは小倉齊「森鷗外初期の文体意識に関する覚書(二)」(『愛知淑徳短期大学研究紀要』第二八号、平成元・三)や竹盛天雄「鷗外 その出発 日本文章会・学海の記録・落合直文の新国文提唱」(『国文学 解釈と鑑賞』第六四巻第七号、平成二一・七)が目目している。

(4) 進藤咲子「明治の美文」(鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文学 第一〇巻 修辭法編』(昭和六〇・一、明治書院)

(5) 武川忠一「近代」への歩み」(武川忠一ほか編『和歌文学講座 第九巻 近代の短歌』平成六・一、勉誠社)

(6) 和田繁二郎「落合直文と鉄幹」(『鉄幹と晶子』第一号、平成八・三)

(7) 木保修・久松潜一『日本文学教養講座 II 近代短歌』(昭和二六・二、至文堂)

(8) 小泉冬三『近代短歌史(明治編)』(昭和三〇・六、白楊社)

(9) 直文には師弟関係を潔しとしていなかった節がある。明治三五年、初対面の鉄幹に直文は「弟子とするには僕にその資格が無い。僕の方が年が上だから、まあ弟として置かう」と告げた(与謝野寛「沙上の言葉(三)」『明星』第五巻第四号、大正一三・九)。明治三〇年に入門した服部躬治は、年内に直文の推輓で新聞に歌を発表する機会を得たが、その際誌面に「学弟」と

紹介されて感激したという(服部躬治「嗚呼秋の家先生」『国文学』第六二号、明治三七・二)。躬治は「先生は、門生どもを、常に、学弟とおっしゃってゝした」というが、ここで躬治がなお「門生」という語を選択していることからも窺えるように、形式的な関係、そして同人の心情としてはあくまで師弟であったことは疑えまい。

(10) 藤岡武雄「新派和歌の発足」(明治神宮編『明治短歌の文学的潮流』平成八・四、短歌新聞社)

(11) 折口信夫『日本文学大系 第十四卷 近代短歌』(昭和一五・二、河出書房)

(12) 大町桂月「嗚呼秋の家先生」(『国文学』第六二号、明治三七・二)

(13) 大町桂月「半生の文章」(『文章世界』第二卷第一号、明治四〇・一〇)

(14) 金子薫園「年譜」(『現代短歌全集 第八卷』昭和六・二、改造社)

(15) 金子薫園「嗚呼秋の家先生」(『国文学』第六二号、明治三七・二)

(16) 尾上柴舟「嗚呼秋の家先生」(『国文学』第六二号、明治三七・二)

(17) 今井彦三郎「嗚呼故落合直文君」(『国文学』第六二号、明治三七・二)

(18) 芳賀實一「嗚呼落合直文君」(『国文学』第六二号、明治三七・二)

(19) 福井久蔵『日本文学史』(明治四〇・一〇、大日本図書)の分析に明らかなように、明治前期の日本文典は執筆者ごとに多様な文法理解を示していた。同書中「中古文典の完成」節は、文彦の文典を「従来最優れたるもの」とする。

(20) 池辺義象「嗚呼落合直文君」(『国文学』第六二号、明治三七・二)

(21) 与謝野寛「年譜」(『現代短歌全集 第五卷』昭和四・一〇、改造)

社)

(22) 引用は逸見久美編『与謝野寛晶子書簡集成 第一巻』(平成一四・一〇、八木書店)。次に挙げる茂世宛書簡も同。

(23) イ・ヨンスク『「国語」という思想』(平成八・一二、岩波書店) 第三章 「国語」の創成

(24) 永岡健右『与謝野鉄幹研究』(平成一八・一、おうふう) 第一章 四節 鉄幹の歌評形式の系譜

(25) 服部隆『明治期における日本語文法研究史』(平成二九・二、ひつじ書房) 「明治期の日本語研究における時制記述」が過去と完了それぞれの概念の位置づけの変遷を明治期の各種文典から探っており、両者を区別するのはウイントンの文典の影響を受けた手島春治・那珂通世が先駆けて、広

るのは明治三〇年代とする。

(26) 直文は歌文に「らむ」を多用する歌人であった。井上通泰は、明治二二、三年頃「若し「らむ」と云ふてにをはを封じたならば、落合君は手も足

も出ないであらう」と直文をからかったことがあるという(井上通泰「嗚呼故落合直文君」『国文学』第六二号、明治三七・二)。

(27) 引用は『子規全集 第十卷 初期隨筆』(昭和五〇・五、講談社)。なおこの一文の存在は大辻隆弘「直文と鉄幹」(『短歌現代』平成九・六)に

教えられた。記して感謝する。

※「[...]」は引用者中略。困いと傍線は引用者による強調。「/」は改行。直文の歌文の引用は『落合直文著作集I』(平成三・七、明治書院)によ

る。なお本稿はJPS特別研究員奨励費211495の研究成果である。